

らんか帖

へソ曲りで生きよう

江崎誠致

新潮社

らんか帖——ヘソ曲りで生きよう

一九八三年八月一日印刷

一九八三年八月五日発行

著者 江崎誠致

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八

電話（業務部）03—二六六—五一—

（編集部）03—二六六—五四一一

印刷 二光印刷株式会社

製本 植木製本株式会社

定価 一〇〇〇円



©1983 Masanori Ezaki

Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-343002-8 C0095

らんか帖
目次

◆蘭花の章

7

蘭花

司書

会食

貴賤

植木鉢

転機

検印

忘郷

名前

給料

屑払い

寿命

ソロバン

ケーキ

癌

脂汗

光の中に

◆乱火の章

43

入営

偶然

飢餓

石

兵卒

空気注射

味覚

復員

わだつみ

分かれ道

念仏

手当金

殴打

塩

人肉

貧乏籤

皮膚

投降

◆嵐過の章

81

復職

咯血

禪

友情

闇

手術

懇親会

戦陣訓

二百十日

賞

同窓

別れ

徳球

交友

無実

里帰り

組織

浮浪者

軍神

自己批判

出会い

特攻

名誉回復

やどかり

再会

◆爛柯の章

133

趣味

讃歌

権利

死亡記事

碁の本

広告

時計

葬式

挑戦手合

演出

掟

遺書

世間の眼

旅

保障

千載一遇

肩書

權威

才能

顔写真

鬼畜

◆あとがき

177

装幀
松田行正

らんか帖——へソ曲りで生きよう

蘭花の章

——新芽が出ると、一本の太い純白の根が伸びる。
見えない地中に、蘭の格調はある。

蘭 花

来て見れば聞きしに勝るサイネリヤ

綾も錦もおよばざりけり

共に小学校の教師をしていた父母の同僚で、九十二歳になる久留米市に住む老翁からの便りに
しるされていた歌である。

その歌の由来も書きそえてあった。私はそのとき赤ん坊だったというから、大正末年ごろの話
である。老翁が友人と連れ立って私の家を訪ねた折、庭いっぱいにならんだ鉢植のシネリヤが
見事に咲き揃っているのを見て、同伴の友人が作った歌であるという。

遠い昔のある日、座興に詠んだにちがいないこんな歌を、老翁が今なお記憶にとどめているの
は、老翁自身が私の父の手になるシネリヤの花に眼を奪われたからでもあるだろう。

たしかに、私の父は花づくりが好きであつたし、かなり上手であつた。素人ばなれをしていた
と言つてよいかもしれない。借家住いだつたが、庭は広かった。その庭に、温室、フリューム、花
壇が所せましくつくられ、何百と鉢がならんでいた。

しかし、私の記憶にあるわが家の庭は、賑やかではあるが綾も錦もといった派手な風景ではな

かった。というのは、華麗な花をつける洋蘭に飽きた父が、次第に和蘭に切りかえ、私が物心ついたころは、その移りが完了していたためである。

和蘭は洋蘭より手間がかかるし眼が離せない。当時現役の教師だった父は、登校前と下校後のすべての時間を、蘭栽培のために消費してもなお足りぬ有様だった。

私には兄が二人いたが、父の手伝いをしたのは末っ子の私だけだった。教師の父に、私が勉強せよという言葉をかけられたことがないのは、多分蘭の手伝いと関係がある。

父が私の学業を気にしなかったはずはない。しかし、私の学業より、蘭栽培の助手を失うことの方を、父はよりおそれていたのだと思う。そう言いきれほど、父の蘭に対する心くばりは徹底していた。

父は家族よりも蘭を愛したと言っても、それは父を辱しめることではない。人間が何事かに熱中する姿というものを、幼年時代の私に見せてくれた父は、言葉での訓戒よりも貴重な人間のありようを教えてくれたのである。

父の蘭栽培は、何しろ大がかりだったので、教職にありながら商売をやっていると誤解する向きもあり、多少評判にもなっていたらしい。愉快ではない陰口が、子供の私の耳にも聞えてくることがあった。

世間の噂が、いかに信用できないものかということを知ったのも、父の蘭からである。金儲けどころか、自分の小遣いの全額を、蘭栽培のために消費し、それ以外、びた一文使わないのが父の生活だった。

私はこの父に何かを買ってもらったという記憶がない。ほんとうに全く一度もないのである。

植木鉢

私がフィリピンの戦場から復員したのは、昭和二十一年の二月だった。上陸地の浦賀から、列車を乗りつぎ、久留米に着くまで丸二日かかった。

空襲に焼かれた街の風景はすで見馴れていたが、久留米駅に降り立ったときは、さすがに平静ではいられなかった。私の家のあたりも焼野原かと思われたのだ。

幸いわが家は残っていた。玄関の戸をあけると、隣家の人と母が話をしていて。隣家の人は私に気づくと逃げるように出ていった。感激の対面を見ては悪いと思ったのであろう。

ところが、私は「ただいま」と言い、母は「お帰りなさい」と言っただけで、抱きあったり涙を流したりはしなかった。

このとき、私の家族は、母と私の二人だけになっていたのだが、それを実感したのは、部屋にあがって、庭の風景を眼にしてからだだった。庭いぢめんに、何百とならんでいた植木鉢が一つも見あたらないのだ。

「おやじさん、死んだのだったね。」

「手紙とどいたのね。」

フィリピンに出征して、一度だけ手紙を出すことが許された。その返事が父の病死を告げる母

の手紙だった。フィリピン出征の三年間に、母と私の間に交わされた音信はただこれだけである。在留邦人に頼んで手紙を出すという方法がないでもなかったが、私はそれをしなかった。母の方は何度か出したらしいが、他は一通も私の手許にはとどいていない。

そんないきさつで、私は父の死を知っていたが、なかば信じられない気持ちもあって、庭にはまだ父の丹精になる植木鉢がならんでいるような気がしていたのである。

それにしても、あれだけあった植木鉢の影も形もない庭が、私には異様な風景に見えた。しばらくして、母は私が庭を見まわしている意味に気づいた。

「植木鉢ね。どうしようかと思ったけど、丁度欲しいという人がいたので売りましたよ。」

「はじめて金になったわけだ。」

「はじめて……ああそうね。でも売ったのはあたしだから、お父さんは道楽のしっぱなしですよ。少しは記念に残しとくんだったかね。」

「そんな必要はないよ。」

どきどきの最中である。二束三文で持って行かれたにきまっているが、その方が父の遺産らしくていい。私は母の処置に賛意を表した。

この母はそれから三十年、八十八歳で死ぬまで、私と生活を共にしたが、晩年には、父を蘭道楽の男以外の人物としては考えなくなってしまった。

「お父さんは花をつくるのがほんとうに好きだったねえ。」

そして結びの言葉もきまっていた。

「無駄遣いばかりかと思ったけど、そうでもなかった。最後に、植木鉢がお金になったからねえ。」

名 前

父の名は静致といった。父は私たち兄弟三人に、自分と同字音の名をつけた。長兄が精致、次兄が正致、私が誠致である。

むろん、同じセイチでは困るので、それぞれ読み方はちがっていた。父はシズムネ、長兄はヨシムネ、次兄はツネノリ、私はマサノリである。

いずれも難解な読み方で、はじめての人で父が名づけたとおりに読める人はまずいなかった。なかでも次兄のツネノリは正解率零であつた。「正は常なり」という言葉が中国古典にあるのだから、だからといって、正をツネと読ませるのは無理というものだ。

正致ほどではないが、誠致マサノリも難解である。私は父につけられた厄介な名前のおかげで、かなり無駄な時間を消費させられている。面倒なので、ふだんはセイチで通しているが、何と読むかと質問されれば、マサノリと答えなければならぬ。

名前はわかりやすい方がよい。しかし、そのことに私は腹を立てているわけでもない。自分の名そのものは、とくに好きでも嫌いでもないが、父の命名には父なりの苦心のあとが察せられて、多少のわずらわしさは、甘受しなければなるまいという気がするためである。

父は明治十七年、福岡県八女郡の農家に生れ、学歴は小学校だけで、苦学して検定を受け、小

学校の教師になった人物である。中くらいの野心を持った青年だったのであろう。

父が生れたときにつけられた名は吾市だった。静致は、父が成人してみずから改名したもので、いわゆる通称としてではなく、戸籍名まで変更したのである。

戸籍名の変更は、そう簡単にはできないはずだが、それを成功させているのは、父が教職者となるにあたって、必死の努力をかたむけた結果であるにちがいない。

当時の父が背伸びしていた姿が眼に浮かぶ。吾市という名は悪くはないのに、学者じみた静致という名を思いつき、矢も楯もたまらなくなったのであろう。

父はそのときの気持を、いつまでも忘れることができなかったのだ。もう一人生れたら、清致と名づけるつもりであったという。母は、この父の命名にかならずしも賛成ではなかったが、強いて反対する理由もないので、何となく押しきられてしまったという。

「同じ名にしたものだから、あなた一人になったのですよ。」

気丈な母が、生前私にこぼしていた唯一の愚痴だった。

昭和十六年に次兄の正致が、十七年に長兄の精致が、十九年に父の静致が相次いで死亡し、二十一年私が戦場から復員してきたとき、わが家のセイチは私一人になっていた。

母の嘆きはわかるが、同じセイチだから一人になったというのはこじつけにすぎない。しかし、偶然にせよ、セイチが私一人になったこともまた事実なのである。

寿 命

私の親兄弟の寿命を死亡順に列記すると、次兄が二十三歳、長兄が二十八歳、父が六十歳、母が八十八歳である。

このアンバランスな数字からは、私の寿命がどのくらいかは見当がつかない。母に似ていればしばらくは生きられそうだが、平均的に見れば余命いくばくもないという感じである。

こんなことを言いながら、実は私は自分の寿命についてあまり考えたことはない。昭和三十年、私は結核に冒された右肺の切除手術を受けたことがある。当時はかなりの死亡率を示す手術であったが、死んだ場合のことを、そのとき私は何も配慮しなかった。

それは現在も変っていない。いつまでかわからない寿命にこだわってもしかたがないし、保つまで保つさでいこうという態度である。

いつ死んでもよいという達観を求める気持は私にはない。そんな心境に達しようという志向がないのだから、いつまでにこれだけの仕事をといった計画は、これまで立てたことはなかったし、これからも立てるつもりはない。しかし、しておきたい仕事がないわけではなく、ただそれができるかできないか寿命まかせであるのは、自分に対して無責任のそしりはまぬかれぬかもしれない。